



図2 見台A 抽斗内のカビ 修理後



図1 見台A 抽斗内のカビ 修理前

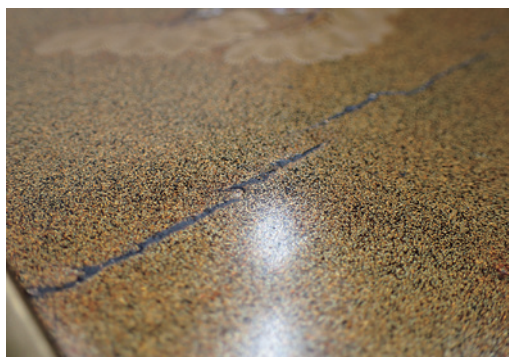


図4 見台B 基台甲板部の亀裂 修理後

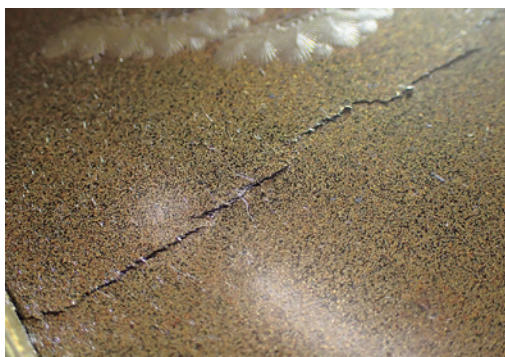


図3 見台B 基台甲板部の亀裂 修理前

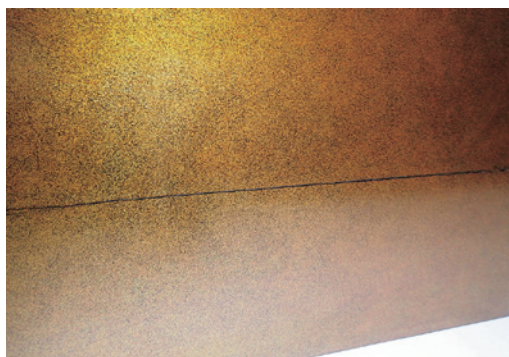


図6 見台B 基台底板の亀裂 修理後

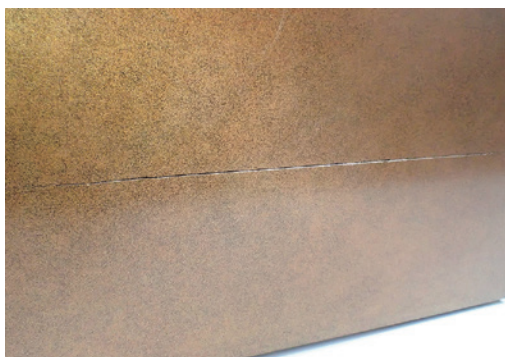


図5 見台B 基台底板の亀裂 修理前

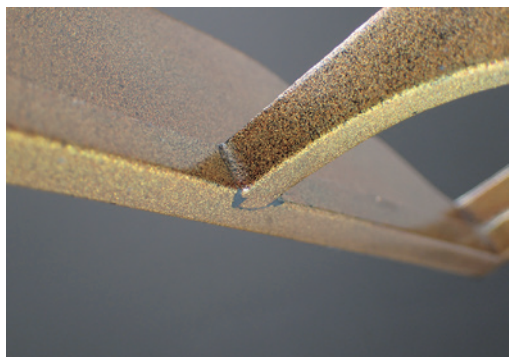


図8 見台B 格子部の亀裂 修理後



図7 見台B 格子部の亀裂 修理前



図10 b阿古陀形火取香炉 塗膜の浮き 修理後



図9 b阿古陀形火取香炉 塗膜の浮き 修理前



図12 c瓶型香炉 縁部分亀裂 修理後

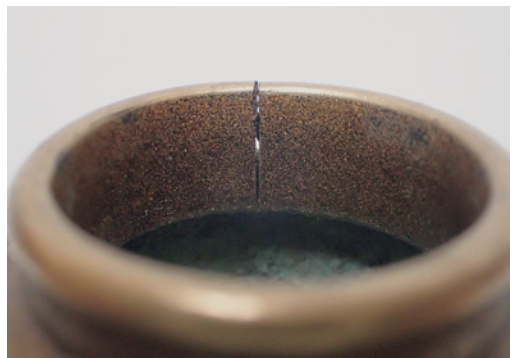


図11 c瓶型香炉 縁部分亀裂 修理前



図14 c瓶型香炉 縁部分亀裂 修理後

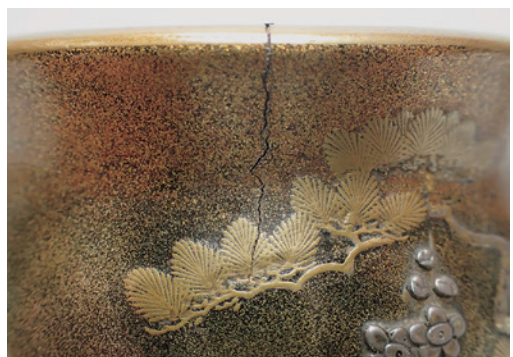


図13 c瓶型香炉 縁部分亀裂 修理前



図16 f壺形炷空入 肩部分亀裂 修理後



図15 f壺形炷空入 肩部分亀裂 修理前

〔修理報告〕

国宝 初音蒔絵見台二基・旅香具箱 一式の修理について

吉川 美穂

はじめに

一 修理方針

二 初音蒔絵見台 二基の修理

三 初音蒔絵旅香具箱 一式の修理

おわりに

はじめに

徳川美術館に所蔵される国宝「婚礼調度類(徳川光友夫人千代姫所用)」は、寛永十六年(一六三九)三代將軍徳川家光の長女千代姫(一六三七～九八)が尾張徳川家初代義直の嫡子光義(一六二五～一七〇〇)のち光友、尾張徳川家二代に嫁いだ際の婚礼調度で、「初音の調度」の名で親しまれている。「婚礼調度類」は、『源氏物語』第二十三帖「初音」に題材をとり、六条院の正月の情景をあらわしたなかに「年月を…」の和歌一首を葦手で散らした「初音蒔絵調度」四十七件、同じく第二十四帖「胡蝶」に基づき六条院の

春の船楽をあらわした「胡蝶蒔絵調度」十件、その他の意匠の蒔絵調度や染織品、刀剣等十三件の計七十件で、一括して国宝に指定されている。⁽¹⁾このうち「初音蒔絵調度」および「胡蝶蒔絵調度」などの蒔絵調度は、室町幕府から江戸幕府に至るまで、時の政権に蒔絵師として仕えた幸阿弥家の十代長重(一五九九～一六五二)が手がけたことが史料から判明している。⁽²⁾精緻な文学的意匠もさることながら、総体梨子地仕上げて、高度な技術を要する高蒔絵や研出蒔絵・平蒔絵・切金など様々な蒔絵技法が駆使されており、漆工史上、最高峰の蒔絵技術を示す名品として高く評価されている。

千代姫(法号・靈仙院)が元禄十一年(一六九八)十二月十日に六十二歳で逝去すると、「初音の調度」を含む遺品の一部が將軍家や尾張徳川家をはじめとする親族に贈られたが、その他の遺品は「靈仙院様御道具」として十鈞(棹)の長持などにまとめられ、江戸から国許の尾張に移送された。⁽⁴⁾翌十二年五月十七日に名古屋に到着した遺品は、間もなく名古屋城内と尾張徳川家の菩提寺である建中寺(現・名古屋市中東区)の宝蔵に納められたとみられる。このうち建中寺宝蔵に納められた遺品は、同十四年六月二十九日の

奥書がある『靈仙院様御道具目録』（徳川美術館蔵）および江戸時代中期の『建中寺靈仙院道具目録』（徳川美術館蔵）から七十件あまりの品目が判明する⁽⁵⁾。

これらは明治六年（一八七三）に、建中寺から尾張徳川家に返還され、両目録に記載された品々のほぼすべてが国宝「婚礼調度類」として徳川美術館に現存していることが確認される。

千代姫の死後から明治時代初期まで厳格に保管された「初音時絵調度」、「胡蝶時絵調度」などの時絵の漆工品は、今もなお漆特有の艶やかな器面の美しさをみせ、同時代の伝存の漆工品と比較しても、格段に良好な保存状態を保っているように見える。しかし、子細に見ると、千代姫在世時の使用痕と思われる箇所や、在世時もしくは近代における修理箇所があることに加え、四百年近く歳月を経たことによる漆塗膜の劣化、さらには木地収縮に伴って構造に弛みが生じ、亀裂や周辺塗膜の剝離・剝落が生じている箇所がある。

このうち特に早急な処置が望まれた「初音時絵見台」二基と「初音時絵旅香具箱」一式、「初音時絵書棚」二基、「胡蝶時絵書棚」一基の計六件の修理施工を、平成三十年（二〇一八）から五か年にわたり、国と愛知県よりの補助金に加え、住友財団の「文化財維持・修復事業助成」により実施した。修理事業は現在も継続しているが、このうち平成三十年六月に着工した目白漆芸文化財研究所（代表 室瀬智弥氏）による見台二基と旅香具箱一式の修理が令和二年（二〇二〇）三月に完了したため、同研究所による詳細な修理報告書などを参照しつつ、以下に報告したい。

一 修理方針

指定文化財漆工芸品保存修理の理念に則り、文化庁の指導のもと、現状保存修理を原則とした。

①事前調査

修理前の現状を調査記録した。また、修理以前に撮影したCT画像等も参考にしながら十分に調査を行った。

②修理工程の決定

傷みの現状を確認し修理工程を決定した上で施工することとした。修理中に発生する問題や新しい事態には文化庁・目白漆芸文化財研究所・徳川美術館の三者で十分に協議しながら対応した。

③情報共有

この修理と並行して、書棚三基（初音時絵書棚）二基および「胡蝶時絵書棚」一基の修理を行う大西漆芸修復スタジオ（代表 大西智洋氏）と作業工程や材料等の情報を共有し作業を進めた。

④修理報告書の作成

施工の際に写真撮影を伴った修理の記録を取り、修理後と比較できるようにし、修理終了後、報告書を作成した。

二 初音時絵見台 二基の修理

「初音時絵見台」二基は、同名のため便宜上、以下「見台A」（挿図1）⁽⁶⁾「見台B」（挿図2）⁽⁷⁾と略称する。いずれも、格子状の書見板に、横木を付し



挿図1 初音蒔絵見台(見台A)



挿図2 初音蒔絵見台(見台B)

た縦二本の支柱を持つ組み立て式の見台で、基台には抽斗が付く。木地接合部をはじめ各所に彫金製の金具が付き、見台Bには梅や椿の花の表現に珊瑚が用いられている。修理の前後で法量に変化はない。

法量 見台A 高五五・九糎 幅五〇・五糎 奥行二八・七糎

見台B 高五六・八糎 幅五〇・四糎 奥行二八・五糎

修理前の状況

見台A・Bともに、経年による塗膜劣化および汚れが確認され、切金と珊瑚(見台Bのみ)が一部剥離している箇所があった。書見板格子の接合部に亀裂があり、抽斗内面には全体にカビが見られた(図1)。飾り金具を止める釘は、一部で緩みが確認できた。

これに加え、見台Aは基台甲板部左下部の橋を象った金具が、経年の木

国宝 初音蒔絵見台二基・旅香具箱一式の修理について



挿図3 見台A 金具の浮き

地収縮により中央部分が浮いた状態であった(挿図3)。

見台Bは、見台Aに比して損傷が顕著で、基台甲板部の左右両端から中央に向かって、乾燥に伴う木地収縮による亀裂が約一五糎の長さで入り、周辺塗膜に剥離が生じていた(図3)。基台底板部には、左右に通して入った一本の亀裂が表裏に幅広く貫通し、割れた底板が上下にずれて段差が生じていた(図5)。その影響で抽斗を開閉する際に底裏が擦れるため、底裏に擦り傷が深く数箇所に入っている。抽斗には当て傷があり、飾り金具を止める釘には緩みが見られ、釘が欠失した箇所もある。書見板格子の表面が何らかの理由で削られており、下地・木地が露出し、また数箇所木地接合部が外れ(図7)、危険な状態であった。

修理工程

修理作業は以下の工程で行った。

①事前調査

先述した修理前の状況に加え、初音蒔絵調度は銀粉および銀板を用いた蒔絵表現が随所に存在し、同部分は経年により錆化(錆が侵食した状態)している。錆化して本来の銀色を失っている部分は、必要以上に触れるとさらに変色するため、クリーニングおよび漆固めの作業を円滑に進められるよ

う、あらかじめ銀を用いたと思われる部分の蛍光X線分析を行った。分析は東京文化財研究所の早川泰弘氏に依頼した。

② 修理前記録・撮影

修理前の現状を記録し、修理作業工程の確認を行った。修理前と修理後の画像比較のための写真撮影を行った。

③ 設置台の製作

修理作業を安全に行えるよう設置台を製作した。また、剥離した切金や塗膜の圧着に使用する心張用の木枠を準備した。

④ 養生・クリーニング

塗膜表面に付着した埃は、漆塗膜や蒔絵、剥離した切金、珊瑚等に損傷を与えないよう毛棒で払い落とした。付着したカビ等の汚れは、柔らかい木綿布や綿棒に精製水を含ませて丁寧に除去した(挿図4・図2)。水分だけで除去できない汚れは、綿棒に少量のエタノールを含ませて除去を行った。



挿図4 クリーニング

た。切金や珊瑚周辺の汚れは、まず切金や珊瑚を膠等で安定させた後に、クリーニングを行い除去した。また錆化して本来の色を失っている銀部分のクリーニングは、細心の注意を払って行った。

⑤ 切金の膠押さえ

全ての切金に膠を含浸させ、剥離した切金は木枠と竹ひごの弾力を利用した心張法で圧着した(挿図5)。

見台Bの珊瑚も剥落が心配される部



挿図5 切金部分の心張

分には膠を含浸させた。

⑥ 梨子地塗膜の漆固め

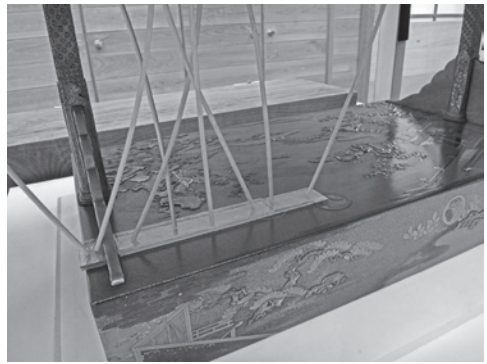
梨子地塗膜は、経年の劣化により本来の艶を失っている状態にあったため、漆塗膜を強化する目的とあわせて漆固めを行った(挿図6)。漆固めは、配合した漆を希釈して塗膜表面に塗布した後、周辺部分を傷めないよう丁寧に拭き取り、乾固させる工程である。塗膜のクリーニングが完了した後に行う予定であったが、切金等の剥落の危険性があったため、膠による安定化処置が完了した後に、まずは使用による擦傷や劣化が生じていた金梨子地の塗膜部分のみに限定して行った。具体的には見台A・Bともに基台表面および内側の底面、抽斗表面および底裏面を対象とし、これ以外の状態が安定している箇所には行わなかった。

⑦ 亀裂部の圧着(見台Bのみ)

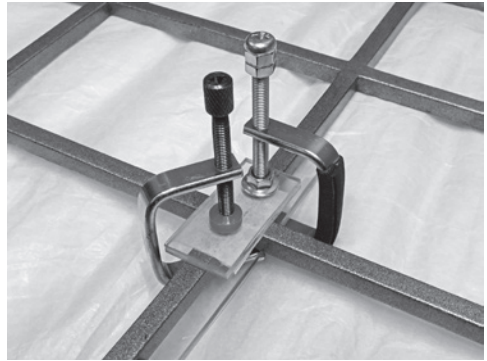
見台Bの基台甲板部に生じた亀裂(図3)に、接着用に調合した麦漆⁽⁸⁾を溶



挿図6 梨子地塗膜の漆固め



挿図7 甲板部の圧着

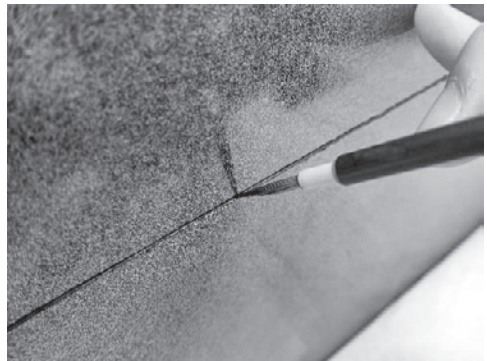


挿図8 格子部の圧着

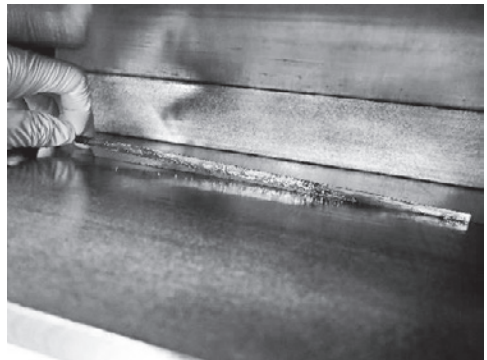
刮で希釈して含浸させ、心張法で亀裂部と周辺の剝離塗膜を同時に圧着した(挿図7・図4)。また書見板格子の接合部の亀裂(図7)には、同じく溶剤で希釈した麦漆を含浸し、歪みを矯正してクランプにて圧着を行った(挿図8・図8)。

⑧ 亀裂の麦漆含浸・接着(見台Bのみ)

見台Bの基台底板に入った亀裂(図5)は、表裏に貫通している状態で、木地の歪みによる段差も生じていたため、刻苧・漆下地の充填だけでは段差を解消しつつ亀裂を塞ぐことが困難であった。そこで亀裂の幅にあわせて檜板を加工整形して漆固めを施した後、差し込んで埋木を行うこととなった。亀裂箇所には溶剤で希釈した麦漆を含浸し、内部の漆固めを行った(挿図9)。その後、養生を施した上で当て木をしてクランプを用いて圧着した(図6)。



挿図9 麦漆の含浸(見台B)



挿図10 檜板の差し込み(見台B)

⑨ 塗膜押さえ

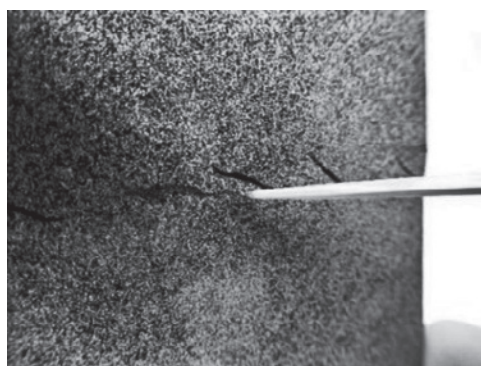
亀裂箇所や損傷箇所を剝離した塗膜には、溶剤で希釈した麦漆を筆で塗膜の際より含浸させ、余分な麦漆を拭き取り、クランプまたは心張法により圧着させた。

⑩ 刻苧・下地整形

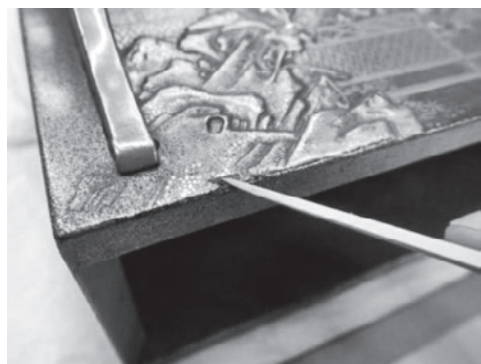
亀裂箇所や損傷箇所には刻苧を充填した(挿図11)。充填は亀裂の深さや損傷の程度に応じて数回に分けて行い、乾固後、砥石等を用いて、周辺塗膜を傷めないよう留意しながら刻苧表面を平滑に整形した。刻苧を充填した箇所や下地が欠失している箇所には、漆下地^⑩による下地付けを行った(挿図12)。乾固後、砥石等を用いて下地表面を平滑にし、漆固めを行った。

⑪ 際錆^{きわさび}

下地整形した箇所や亀裂箇所、塗膜押さえを行った箇所に、手の接触による塗膜剥落防止を目的として錆漆^⑪を施す際錆^⑪を行った。



挿図11 刻苧の充填



挿図12 下地付け

⑫釘の緩み調整

釘が緩み、釘頭が突出している箇所は、可能な範囲で軽く打ち直し、緩みの調整を行った。

⑬漆固め

再度、梨子地塗膜の強化を目的として、漆固めを行った。

⑭修理後写真撮影・報告書作成

なお、修理作業前に判明していた問題点の一つである見台Aの基台甲板部の左下にある橋の金具の中央部分の浮きは、金具の反りが強い的缘故に圧着することが困難で、文化庁・目白漆芸文化研究所・徳川美術館との協議の結果、現状のままとした(挿図3)。

また、見台Bの支柱の先に付いた金具は、釘一本が欠失していると見られたが、修理作業のため金具をずらしたところ、金具下に釘穴が存在しな



挿図13 見台B 釘の欠失

いことが判明した(挿図13)。後補で釘穴を埋めた形跡も見られないことから、当初から釘が打たれていなかったと判断した。三者での協議の結果、支柱先端の木地に歪みがあるため金具が脱落しない状態にあることから、釘の新補は行わず、金具を所定の位置に戻すのみとした。

三 初音時絵旅香具箱一式の修理

「初音時絵旅香具箱」は、旅持ち用の香道具一式が収められた印籠蓋造の箱である(挿図14)。両長側面の中央に彫金製の紐金具が付く。法量と内容品は左記のとおりで、修理の前後で法量に変化はない。内容品のうち、金属製品である銀製銀葉挟と鍍金香挟以外は、親箱同様の加飾が施されている。但し、台板は梨子地の加飾のみである。

旅香具箱 法量 高一六・九糎 幅二六・九糎 奥行二〇・九糎
a、香盆 一枚



挿図14 初音蒔絵旅香具箱

b、阿古陀形火取香炉（銀製火屋付）

一口

c、瓶形香炉 一口

d、結文形三重香合 一合

e、橐形香合 一合

f、壺形炷空入 一口

g、銀製銀葉挟 一個

h、鍍金香挟 一個

i、台板 一枚

修理前の状況

経年による塗膜劣化および汚れが見ら

れた。一部剝離している切金があった。内容品のうち、b阿古陀形火取香炉およびc瓶形香炉、f壺形炷空入の三点が特に損傷が著しく、なかでもb阿古陀形火取香炉は、内面および見込の梨子地面に断文が深く入り、塗膜の浮きが多くみられた（図9）。c瓶形香炉とf壺形炷空入にいたっては、木地から大きな亀裂が入り、内外に貫通していた。このうちc瓶形香炉は、上縁二箇所放射状の深い亀裂が入っていた（図11・13）。f壺形炷空入は、内部に嵌め込まれた銅板と思われる金属と外側の木胎との収縮率の違いからひずみが生じ、肩の部分に同心円状の円弧を描くように二本の深い亀裂が生じていた（図15）ほか、上縁から縦方向にも深い亀裂が入っており、それぞれ塗膜面に段差が確認できた。また内側の金属の錆化が激しく、緑青が生じていた。

これら三点は、香木を炷くため実際に使用されていたとみられ、塗膜劣

国宝 初音蒔絵見台二基・旅香具箱一式の修理について

化はその際に用いた炭団や香木の炷空（焚燬）の熱の影響と推測される。

修理工程

①事前調査

②修理前記録・撮影

③作業台製作

④養生・クリーニング

⑤切金の膠押さえ

⑥梨子地塗膜の漆固め

⑦亀裂部の圧着

⑧塗膜押さえ

⑨刻苧・下地整形

⑩際錆

⑪漆固め

⑫修理後写真撮影・報告書作成

修理工程としては、見台二基と基本的にはほぼ同様のため、重複する作業については記述を省略し、旅香具箱の修理において特記される事項のみにとどめる。

f壺形炷空入の内側に嵌め込まれた銅板の緑青が噴いている箇所については、文化庁・目白漆芸文化研究所・徳川美術館との協議の結果、当時の使用感を残すという判断で修理工程④のクリーニングは行わず、現状のままとした。

見台と同様に、梨子地塗膜の強化のため漆固め（修理工程⑥）を行ったが、



挿図15 麦漆の含浸(f壺形炷空入)

劣化がみられる旅香具箱の見込・底裏面、a 香盆の畳摺、b 阿古陀形火取香炉、c 瓶形香炉、f 壺形炷空入のみとし、安定した部分には行わなかった。このうち、b 阿古陀形火取香炉は、熱による損傷で、内面と見込部分の梨子地塗膜や梨子地粉の下付漆まで劣化した状態であった。そのため、この部分に麦漆を使用すると、漆を拭き取る際に梨子地粉が剝離し、塗膜が黒ずんでしまう恐れがあるため、溶剤で希釈した梨子地漆を筆で塗布した後、余分な漆は押さえ拭きして乾固させた。

b 阿古陀形火取香炉およびc 瓶形香炉、f 壺形炷空入の亀裂部(図9・11・13・15)は、接着用に調合した麦漆を希釈して含浸させ(挿図15)、その後、心張法で圧着を行った(修理工程⑦、図10・12・14・16)。

おわりに

「初音蒔絵見台」二基と「初音蒔絵旅香具箱」一式の修理は令和二年(二〇二〇)三月に完了した後、それぞれ元箱に収め、徳川美術館の収蔵庫に格納した。同年十月二十一日から十二月十三日まで、修理の完了を記念して同館名品コレクション第五展示室でこの三件を、修理工程を示した写真パネルとともに特別公開した。今後も名品コレクション展示室で、順

次、大名家の奥道具を代表する作品として展示していくほか、特別展・企画展での展示や他館の展覧会への貸出等に活用していく予定である。

最後に、長期間に及ぶ修理施工にご尽力いただいた目白漆芸文化財研究所をはじめ文化庁や愛知県・名古屋市の関係各所の方々、住友財団に対し、この場を借りて感謝申上げる次第である。

註

- (1) 平成八年六月二十七日指定。指定番号「工第二五四号」。
- (2) 「初音蒔絵調度」が幸阿弥家十代長重によって製作されたことは、『幸阿弥家傳書』(「幸阿弥家傳書 幸阿弥家傳卷」『美術研究』九八、美術研究所、一九四〇年)、『幸阿弥家記』(鈴木規夫「幸阿弥家記 幸阿弥家蒔絵品目」『漆工史』五、漆工史学会、一九八二年)の幸阿弥家側の記録で確認される。
- (3) 元禄十一年(一六九八)十二月二十九日に五代將軍綱吉に「古今集」「千載集」、御台所の信子に「墨絵源氏」や琴などが(「泰心院様公迎御日記」・「事蹟録」、ともに徳川林政史研究所蔵)、また翌十二年正月二十七日に夫・光友に掛物や書棚、屏風などの遺品が贈られた(「事蹟録」)。
- (4) 千代姫は、長らく江戸の上屋敷である市谷邸を住まいとし、逝去した当時も市谷邸に在住していた。江戸での「初音の調度」の保管場所も同邸とみられる。「事蹟録」元禄十二年五月十七日条に左記の記事がある。
尾州 一 靈仙院様御道具十鈞到着右御道具建中寺ニ
御宝蔵出来納置候様ニト被 仰付御右筆部屋留
- (5) 『新版 徳川美術館蔵品抄⑤ 初音の調度』(徳川美術館、二〇〇五年)一三九頁一四四頁に「初音の調度関係資料」として翻刻がある。ただし、「初音蒔絵書棚」二基と「胡蝶蒔絵書棚」一基の三基を一件とするなど、現状とは数え方に異同がある。
- (6) 所蔵番号は初音調度三〇、前掲註(5)図版番号三八。
- (7) 所蔵番号は初音調度三一、前掲註(5)図版番号三九。
- (8) 精製水で水練りした小麦粉に、生正味漆を混ぜ合わせる。

(9) 麦漆に麻の繊維および木粉を混ぜ合わせる。

(10) 精製水を含ませた地の粉に生正味漆を混ぜ合わせる。

(11) 精製水を含ませた砥の粉に生正味漆を混ぜ合わせる。

(徳川美術館 学藝部部長代理)

金 鯨 叢 書 第四十八輯 [年一回刊行]

——史学美術史論文集——

令和三年三月三十日 編集
令和三年三月三十日 印刷・発行

編集者

〒171-0031

深 井 雅 海
徳 川 義 崇

発行者

〒171-0031

東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
公益財団法人 徳川黎明会
電話 (3950) 〇一一一番 (代)

〒461-0023

東京都豊島区目白三ノ八ノ十一
徳川林政史研究所
電話 (3950) 〇一一七番 (代)

〒605-0089

名古屋市東区徳川町一〇一七
徳 川 美 術 館
電話 (935) 六二六二番 (代)

印刷所

株式会社 思文閣出版
電話 (533) 六八六〇番 (代)